

シンガポール本願寺と日本語学校

柴田 幹夫

はじめに

「新嘉坡も商業地であるから、純乎たる宗教上の信仰を得て居る人は乏しいであらうが、兎も角形式上から見ると、香港よりは遙かに勢力があるやうだ、基督教ではセントアンドリュース、カセドラルは市中を見物するとすぐ目に付く程な建築物だ、其外二三の寺院もあつた様だ、印度風の寺院も市中で異彩を放つておる、佛教では本派本願寺の出張所があつて、多大の迫害があつたにも係らず、名望漸く隆く、今では日本人中の上流社會といへば、本願寺、領事、三井と三幅對になつて居るさうである」と清水黙爾は明治 35 (1898) 年 4 月 3 日の日記に書き残している⁽¹⁾。本派本願寺(西本願寺)が初期のシンガポール日本人社会の中で重要な役割を果たしていたことがわかる。当地の日本人社会において本願寺の果たしていた役割は、葬式や布教など日常の佛教寺院としての役目だけでなく、日本語学校の設立や慈善事業への関わりもあげられる。

本稿では、シンガポールにおける本願寺と本願寺の設立にかかる日本語学校の実態について、また大谷光瑞とシンガポールの関係について初歩的ではあるが、紹介していきたい。

1 シンガポールの日本人社会

シンガポールという言葉は、サンスクリット語のシンガプーラ(獅子の町)から来たと言われるが、異説もある。とはいえ、シンガポールの象徴である「マーライオン」像を見れば、「獅子の町」というのも肯ける。マレー語ではシンガー(singah)は「立ち寄る」という意味でプ라우(pulau)は「島」の意味であるから、まさに「立ち寄る」「港」、中継港の働きをしていたと考えられる⁽²⁾。

シンガポールは、イギリスの東洋経営の中心地であり、この地を軸として、インド、パキスタン、ミャンマー、スリランカ、マレーシア、香港などを植民地支配下においており、シンガポールを中心に、東西南北へと交通路が延びていた。このような意味において、まさにシンガポールはイギリスにとってのアジアの中心地であったと言ってよい。

南回り航路で、ヨーロッパを結ぶ経由地として、シンガポールは日本にとっても重要であった。そこでまず、日本の政策としての南進論をふくめ、シンガポールと日本の関係を日本人社会を中心として見て行きたいと思う。

(1) 南進論という考え方

シンガポールの日本人社会を理解する上で、まず押さえておくべきことは、日本人の南方関与、つまり南進論の系譜である。ここで言う南進論とは、芳井研一氏によれば「日本は15年戦争期において、南方に進出し大東亜共栄圏を建設することによって不足がちな資源を確保し、自給自足地帯をつくろうとした考え方」であり、「軍政を行い資源収奪を目的としたもの」であったとされる⁽³⁾。また矢野暢氏は、単に資源確保という面だけではなく、「日本人の海外進出のもっともふさわしい地域として、この地域の潜在的な重要性を他の地域より大きく描こう」とする。「北進論にかたくなに対抗」し、「南洋の未開発性、政治的後進性を強調し、それを発展させるのは日本の使命である」、「南洋が西洋の帰属物であるということを先天的に認めない」とする立場をとる。「陸の思想と言うよりは海の思想として語られる」ことの方が多く、そのため「海軍増強、造船力強化、航路延長、貿易振興、移住の自由などの政策提言を伴う」ことが多い。また、「日本人の南洋、海への関心の遅れ」を憂い、「南方に関心を持つことによって、日本国内の社会的、経済的問題が解決できる」と考えたとする⁽⁴⁾。矢野氏は南方に関わった人々を以上のように考えて、「ある程度創造的な役割を果たしたものにだけ、「南進論」者をむしろ選択局限していくほうが妥当ではないかと考える」としている。政策としての「南進論」は、むしろ芳井氏の指摘されるように「軍政を行い資源収奪を目的としたもの」に収斂されるであろう。その結果として東南アジア各地に日本は軍政を敷いたのである。矢野氏は「南進論」のなかで創造的な役割を果たした人物を取り上げて、共通点を見いだすという方法で「南進論」を考えていた。

(2) 音吉と福沢諭吉

この交通の要地シンガポールに漂着した日本人がいた。名を音吉と言う。1862（文久2）年に上海からシンガポールに移り住んだ。音吉は現在の愛知県美浜町小野浦の出身で、見習いの船乗りであった14歳のときに、遠州灘沖で時化に遭い、船は難破し、太平洋を14ヶ月に渡り漂流した。14人の乗組員のうち生き残った音吉たち3人は北アメリカに漂着した。そこでイギリス船に助けられ、バンクーバー、ハワイ、ロンドンを経てマカオに送られた。マカオではドイツ人の宣教師ギュツラフに預けられ、聖書の初の日本語訳に協力している。その後1837年にモリソン号で日本に向かったが、鎖国政策をとっていた日本は受け入れず、砲撃をもって追返した。その後上海を中心に貿易商として活躍した。1854年イギリスの通訳として長崎を訪れている。1867年にシンガポールで没した⁽⁵⁾。

1862（文久2）年幕府派遣の遣欧使節団一行（正使・竹内下野守、副使・松平石見守・京極能登守と従者総勢36名）に若き日の福沢諭吉が同行していた。福沢は遣欧使節に随従し、見聞した事柄を日記「西航記」に書き残している。帰国の途中シンガポールに立ち寄った際のことを以下のように記している。「文久二年壬戌正月十九日 十七日経緯百二十四度二十五分 程

百五十里 朝第五時新嘉坡に着す。第一時上陸し、馬車に乗り旅館に至り、夜本船に歸る。此地氣候常に熱し。大抵八十三、四度なり。草木よく繁殖して四時落葉なし。土人冬を知らず。新嘉坡も英國の所轄に係る。人口十萬許にして人種三に別る。第一土人三萬口、第二歐羅巴二萬口、第三支那人五萬口、最も多しとす。蓋し支那人の此地に移住するもの多きは當今本國の亂を避くるなり。新嘉坡も全く英國の政治に服従すると雖ども、土人の勇悍才力あるは支那人の右に出づ。旅館にて日本の漂流人音吉なるものに遇へり、音吉は尾州薦郡小野村の舟子にして、天保三年同舟十七人と漂流して、北亞米利加の西岸カリホルニーに着し、其後英に行き、英國の戸籍に屬して上海に住し、新嘉坡の土人を娶り三子を生めり。近頃病に罹りて、撰生の為十日前本港に来り、偶ま日本使節の來るを聞き來訪せり。余仔細に其面色を認むるに、かつて見ることある者の如し。由て之を問うに、九年前英國の軍艦に乗り長崎に至りしことありと云う。即安政元年寅年余長崎に遊学の時なり」と記している。奇縁であつた。ところで音吉がわざわざ福沢一行に会いに來た理由は、知り得た海外情報、特に中國についての情報を語りたかつたのではないかと考えられる。福沢が聞いた中國事情というのは「音吉、支那の近況を説くに、去年七月咸豐帝殂し、太子位に即き、同治帝と云う。年七歳なり。内外の事務は尽く帝の叔父恭親王に委任す。去年英佛との戦争は、事既に平ぎたりと雖ども、調髮（長髮？一筆者注）の賊、勢益々盛強にして、方今其兵員殆ど二百万に近し。南京を根拠と爲し、江西江北諸州を陥れ、尚ほ進で北京近傍に迫り、行々諸方を侵掠し、男子年十五より四十なるものは、捕て兵卒と爲し、兒女老人は或は殺し、過る所尽く火を放て家を焼き田野を荒らし北京の辺六百の地は全く人煙を絶つ」⁽⁶⁾というものであつた。このような情報が、その後の福沢にとってどのような価値を有するものかは明らかではないが、この音吉こそがシンガポールに定住した初めての日本人であつた。

(3) シンガポールのからゆきさん

数奇な運命を辿つた音吉はシンガポールにはじめて來た日本人として名をとどめたが、名も知れず去つていった無辜の女性たちがいた。からゆきさん、娼妓、醜業婦や娘子軍と呼ばれた人たちであつた。

1900（明治 33）年イギリス渡航の途中経由地としてシンガポールに立ち寄つた藤井宣正⁽⁷⁾はシンガポールの様子を次のように記している。「……上陸致候處、佐々木氏は小棧橋迄迎はれ候、氏は福井縣の出身にて、曾て本願寺の文學寮に在學中は、生に文學を學びし縁故も有之、又、現在は本願寺の布教使として、昨年より此の新嘉坡を駐在致居ることなるに、生は其本願寺より西歐へ渡航致候儀なれば、不勘好意を以て迎取せられ候事にて、直に箱馬車二輛を驅りて、氏の宿所なる馬來坡街の松尾方へ參り候……松尾旅館は、日本娼家の間に介在する爲め、娼婦は店頭を來往致し居り候も、家居存外廣く、生等が占め候室は二十畳位に有之、風人も宜候、此に日本風の午餐を濟せ、暫時休息の間に佐々木氏より土地の狀況等を承り候。其中、目下所謂東洋娼業第一の集散地たる當地娼家の話は、粗次の如くに有之候。日本人にて此業を直

接又は間接に營み居り候家は凡そ一百戸あり、娼婦は三百、又之に關する業務に従事する男子二百、正業者（旅店雜貨商）は凡そ三十戸の由、此外此島内の村落にもボツゝ娼婦は有之候由、新嘉坡港にては娼家に男子の居住を禁じある故、各娼家は營業場をオッヒース（公司）、家族の住居をプライベート（私宅）と分ち、午前二時迄營業致し、其間は女主見張り居り候も、時間來れば仲居に後事を托して私宅へ引取申候様子、娼婦は多くは長崎島原天草の産にて、一五六才の少女を密航者（是は所謂「人買ひ」の名稱と相成居候由）欺誘致し來りて上陸し、チャイニス、プロテクトレート（渡來労働者、殊に娼婦の身元取調等を幹する役所）の取調べに對し、自己の任意にて娼業を營まんとて來新せる由を申せば許可せられ、此に彼の密航者は周旋者に少女を引渡申し候、其手数料、實は身代は、一人三百圓より六百圓までの間に有之、比較的、短身豊肥にして眼球の大なるものが歓迎せられ候由、其の故か、街頭に出入致候女姓を瞥見仕候に、生等の眼には、多くは一五六才と見え申候、其風装は、浴衣細帶、前髪は多くは切りて縮らせ、後髪は桃割れ又は蝶々に結び居り候が、内地の娼の如く其結び方頗る太く有之、別に耻しき様子もなく、否、寧ろ無邪氣にブラブ致し居り候」⁽⁸⁾。藤井の見たものは日本人醜業婦や娘子軍の拠点としてのシンガポールの姿であった。

1902（明治 35）年当地にやつて来て、医院を開業した西村竹四郎は醜業婦たちを次のように描写している。「我が大和撫子！！娘子軍の本據は海南街、馬來街マラバ街の街つゞきに三四軒、飛び離れてパンタ街、サゴ街等七八軒あり、三、四百の娘子が柳巷狭斜の天地を作つて居つた。彼女たちの分布を見ると、馬來半島、シヤム、スマトラは云ふに及ばず遠く印度、アフリカ、アウストラリアに及び、寒村僻地至る所に、日本娘を見られぬ事がないといふのだから驚かざるをえない。此の娘子軍の出身地は多く九州地方で、就中天草、島原産れが首位を占め、明治初年に始まり、僅か三十四、五年間に此の大分布を形成したものである。彼女等の勇氣と征服力の偉大さは眞に賞嘆に餘りあるものがある。此の一廓を散歩したものは番號を書いた瓦斯燈が家の前にあるを見るだらう。此の番號は何々樓何々屋といふ代りの標識であるのだ。例へば美人揃ひで有名なのは十五番、三番、二十五番、五番と標識せらるゝ如きである。彼女等は軒下に籐椅子を並べ五人、六人車座を作つて嫖客を吸引するのだが、その姿態を一瞥すると世にも異様なものであつた……東西往來の船員等が良質の石炭を使ひ、新嘉坡着を一時間でも早くと焦る裏にはかゝる天國が存在するからだとの事だ。茲の天國たるや東西兩洋の中間に位してゐるので、需要滋々盛んに供給彌々隆んならざるを得なかつた」としている⁽⁹⁾。

清水黙爾もまた、シンガポールで娘子軍の存在に眉を顰めていたようである。清水は 1902（明治 35）年インド・ネパール留学の途中に当地に立ち寄つた。彼の日記には「ここでは英語よりは馬來語の方が多く通用する事、布教が極めて面倒な事、醜業婦と云ふパチルス（Bazillus ドイツ語 ある事物につきまとして、その利を奪ひ、または害するもの一筆者注）が繁殖して困る事、醜業婦は毎月三十人や四十人は本國から輸出される事、醜業屋は無税で男子と丁年未満の女子は公然置く事を許されない事……醜業婦は無作法で贅澤で女學生の様な風をして居る事、香港には身を醜業婦に沈めて弟を帝國大學に入學させ、毎月の學資を送つて居る健氣な女が一

人ゐるが、こゝにはそんなものは薬にたくもない事……日本人の女ときたら先醜業婦ばかりなので裁縫などはトント御存知がないさうだ……醜業婦の勢力はどうか。香港も盛んであるが、新嘉坡は殊に全盛の勢らしい、人数は實に四百人と註されてゐる、七百人中醜業婦が四百人！馬來街の日本町にのたくつて居るさうである」⁽¹⁰⁾と記している。

西村や藤井、清水が見た醜業婦たちは、いつ、どういう経過でシンガポールに来たのであろうか。シンガポールにいわゆる醜業婦と娘子軍と呼ばれる日本人娼婦が多く来たのは、清水洋が指摘するように、まず第一には、当然ながら多くの需要があったことである。1869年のスエズ運河の開通や蒸気船の普及により、南洋の物産は早くまた安くヨーロッパ市場に提供されるようになった。マレー半島、タイ、蘭印などの後背地に囲まれたシンガポール港は国際的貿易港としての重要な地位を占めるようになった。二番目としては、従来からの錫の生産に加えて、ゴムの生産が始まり、大量の移民労働者が必要となったことである⁽¹¹⁾。このような社会的状況に加えて、特に日本人娼婦はとりわけ人気が高かった。「日本人娼婦は海峡植民地政庁から鑑札（許可）を受け、医師の検診を定期的に受けていたため清潔であり、しかも白人、華人、マレー人、その他あらゆる国籍の客を相手とした。また、彼女らは片言のマレー語、英語などを話し、客の楽しませ方も熟知しており、その上正直者だったので、客の金品をごまかすようなことはほとんどなかったといわれる」⁽¹²⁾。前述の西村氏の分析を待つまでもなく、彼女たちの故郷は九州特に天草、島原地方の人が多かった。それは九州と海外の歴史的関係であるという。江戸時代中期以降、多くの天草人が他の地方に出稼ぎに行っていたが、多くは、長崎に向かったと言われている。居留外国人たちは、日本人女性を呼び入れていた。長崎の外国人たちは、日本人女性・少女を女中、乳母、子守として雇っていた。その後九州の娘が中国や南洋へ密航するためのルートができあがっており、長崎やその周辺地域から多くの女性が「出稼ぎ」に行くことが可能になったということである⁽¹³⁾。さらには、初期のシンガポールにおける重要人物（顔役）は、多くは娼婦たちを引き受ける親分たちであった。例えば、後述する日本人墓地を作った二木多賀治郎や十五番の経営者であった渋谷夫妻などはシンガポールにおける女郎屋の親分たちであった⁽¹⁴⁾。

(4) シンガポール日本人墓地

社会を形成する上で、もっとも重要なことの一つに冠婚葬祭があげられる。共同社会を維持する上でも重要なことであり、また冠婚葬祭は、社会生活の規範ともなり得るのである。ましてや日本を離れ異国で生活するとなれば、なおさら冠婚葬祭は日本を意識させる重要な要因であった。

シンガポールに日本人墓地が造られたのは1888（明治21）年のことであった。当時の日本人社会の有力者であった二木多賀治郎は自分の持っていたゴム園のはずれにある荒れ地を日本人墓地にしようと考えた⁽¹⁵⁾。その時の様子を『南洋の五十年』は以下のように記している。「スラングンに始めて新嘉坡日本人共同墓地を二木多賀治郎氏が作ったのは、明治廿一年十一月の

ことで、當時在留邦人の男子僅かに十七人、娘子軍は世界無宿のルンペンと看做され、彼等の病者は海峡植民地に華僑富豪陳徳勝が建立して慈善病院に托する外致し方なく、其死者及び斃牛斃馬の埋葬地に送られ恰も日本にて行倒れ處分する如くなりしを哀れに思ひ、幸ひ澁谷銀治氏が曾て上海に在り本願寺の事業たる慈善會墓地の制度を知つてゐたので、二人力を併せ政廳に願ふて日本人墓地を創設し、囚人墓地に埋められてゐた同胞廿七人の白骨を牛頭馬骨の間より掘出し新墓地に改葬し、無縁塚を建立し、永久に同胞相憐れむ情を表したのであって、爾來幾年墓地經營の困難に加へ南洋在留邦人に常事として引續ける紛争に波動さるること一再ならず、幾度か崩れんとしたのを二木氏の堅忍努力で漸く維持して來たのであった」⁽¹⁶⁾。牛や馬と一緒に葬られた先人たちの弔らおうとした自然発生的な行為であつたのであろう。あるいは邦人界での実力者たらん行為であつたのかも知れない。その後日本人墓地の經營や管理は、「共済會」と「日本人會」が共同で墓地の管理を行うこととなつた⁽¹⁷⁾。

ただ葬祭を司る僧侶の存在がなければ、「佛造つて魂入れず」ということになってしまう。シンガポールに初めて渡來した日本人僧侶は、曹洞宗の釋樸仙和尚であつた。1893（明治 26）年樸仙はインド佛跡參拝の途上この地に立ち寄つたのである。そこで請われて日本人墓地内に草庵を建てて供養や読經を行い、在留居留民を大いに慰めていた。その後、1911（明治 44）年に永平寺の日置黙仙老師が當地に來られ、釋教山西有寺という寺号を与えられたという⁽¹⁸⁾。その後、この西有寺の住職が代々日本人墓地の管理を行つたとされている。

ここにおもしろい話があるので紹介しよう。シンガポール本願寺の出張所長であつた佐々木千重の「新嘉坡通信」である。「偕て當新嘉坡に於ける日本佛教僧侶の沿革を尋ねるに、由來遙かに遠しと雖も、先づ其長くして且つ其尤も古きものは殆ど、七年間此地に滞留して、目下或女郎屋の食客門番となり居る、口に曹洞宗とやら稱ふる某なる者ありて自ら日本僧と名く、晝夜酒徳利を枕にして醜業婦の明巢を狙ふ、厄介腥坊主あり、常に葬式を慕ひ、讀經の切賣を押賣し、盛んに日本佛教の體面を汚しつある大膽物あり……」⁽¹⁹⁾とある。この曹洞宗の生臭坊主は誰かという詮索は止めよう。

2 シンガポール本願寺

本願寺とシンガポールを含む南洋とのつながりはかなり早く、すでに 1898（明治 31）年には、巡教使土岐寂靜・朝倉明宣の両師が本願寺の命を受けて、南洋に宗教視察のため訪れている⁽²⁰⁾。もちろんこのことは來るべき海外開教に備えてのことであつた。

海外開教を積極的に推し進めたのは、本願寺の宗主であつた大谷光尊（1850 年～ 1903 年）である。本願寺 21 世大谷光尊（明如上人）は、きわめて進歩的な考えの持ち主で、明治初期の廃佛運動に抗するとともに、宗門内の新進僧侶をヨーロッパやアメリカ、アジア各地に派遣したり、また本山運営に議會制度を取り入れるなど、宗門の近代化に努めた人物であつた。光尊は、日清戦争後に海外開教の機運が出てきたので、嗣法鏡如（大谷光瑞）とともに、積極的に

海外開教に出たのである⁽²¹⁾。アジア開教に限っていえば、1886（明治 19）年にロシア沿海州ウラジオストクに多門速明を派遣したことはじまり、1896（明治 29）年にはウラジオストク・セメヨーノスカヤ街に布教所を設立するに至った⁽²²⁾。北の要地にまず本願寺を作り、次に南の地に本願寺が勢力を伸張し、最後に中央部すなわち中国を視野に入れて本願寺が中国各地に拠点を作り出していくのである。

シンガポール本願寺に話を戻そう。初めてシンガポールに派遣されたのは、佐々木千重であった。佐々木千重は福井県の生まれで、1894（明治 27）年本願寺の設立に係る文学寮高等科を卒業している⁽²³⁾。その後、大谷光瑞の援助によって、1896（明治 29）年 9 月佐々木千重が南洋渡航を企てて、翌 30 年より木曜島で布教を開始したが、うまく行かなかったようである⁽²⁴⁾。1898（明治 32）年 8 月大谷光瑞は佐々木千重をシンガポールに派遣し、後述の佐々木芳照とともにシンガポール・ヴキクトリア街に布教所を設立した。その時の様子を以下のように記している。「當布教場は昨年八月、小生始めて山命を奉じ、渡航の上市の中央、ヴキクトリア街三百七十七號に現はれ、已來小生及び馬來語通譯生佐々木芳照の二名の駐在となり、夫々弘教傳道の法を講ぜしが、其當初は僅に手を在留日本人間の子弟教育に着けたるに止まりしも、遂に場内多少の増築を施し、漸く會堂の形と爲し、開場式を本年一月二十八日舉行することゝ爲れり、場は本屋、食堂、浴室、料理屋、便所の五棟に分かれ、就中本屋は七間四面、洋風二階立の木造にして、階上を客室及び住宅と爲し、階下を會堂學校事務室の三とす、各室の構造配置等、假布教場用としては、恰かも新たに建築せしが如く至極適當し尚ほ屋の前後には廣き庭園を有し熱帶異様の樹木は、四時不絶異種の花果を結び、庭前の門戸亦高くして粗なるに非ず、而かも其周圍諸宗の會堂寺院を以て満たさるゝは奇中の奇に候」と。さらに 1 月 28 日舉行の開場式については、「本年（1898 [明治 32] 年—引用者）一月廿八日午後二時、豫て本場の開場式に付、樓上樓下に控へたる多數の參集者は、振鐸數聲、式の開始を告ぐるを、同時に式場たる樓下の會堂に着席したるも、其數の意外に多かりし爲め、堂内装置の腰掛は直に填充して止むなく隣室まで佇立を請ふに至れるは、嘗て日本人の會合として當地に見ざるの盛況なりき、固より人を貴賤貧富に由りて別つ可き筈なく宗教界の事なれば、日本人としては帝國領事を始として、醫師商人より其他妖嬌を競ふ女子に至るまで、外國人としては錫蘭、支那、緬甸、其外各種の人種、一切平等に入り交じりて、一堂に會せしことなれば、目も綾に珍らしき光景、中々本國に於て見能ふ所に非ず、就中特に記す可きは錫蘭の高僧六名、他に緬甸の高僧一名都合七名が、彼の印度大菩提會長ダールマパーラ氏と共に、此式場に參列したることゝす、彼等は曩に印度北部テライ地方に於て、新たに發見せられたる釋尊降誕の地より得たる遺物送骨等の英政府より、シャム、錫蘭、緬甸の三國に分配を蒙ることゝなり、錫蘭佛教徒代表者此一行七名が、右拝受の爲、シャムに到り、歸途幸に此式場に列することを得たるなり、さて式は小生自ら教壇に立ち、佛前に禮拜誦經を以て始まり靜肅の間に進行して後參會者に對する小生の挨拶并に將來本場の起さんとする布教上の計劃、及希望等に關する一場の演説を爲し、續ひてダールマパーラ氏は氏の經歷談及印度宗教事情、并日本佛教徒に對する希望等の演説（佐々木

千重通譯)を爲せり、次に布教場附屬教育部生徒總代鶴山善太郎の祝詞朗讀次に來賓中よりドクトル中野光三氏の演説ありて、終りを告げ、別室に於て立食の饗應あり、又錫蘭人の佛陀伽那寫眞畫配布等ありて、賑々しく同日午後五時太陽の入ると共に閉場を告げたり」⁽²⁵⁾と記し、釈迦誕生の地から発見された釈迦の遺骨をシヤムから持ち帰る途中に新嘉坡に立ち寄ったセイロン佛教会代表团と、インドの高名な僧侶であるダルマパーラ氏が開場式に参列された喜びを語っている。

シンガポールに於ける本願寺は、平素の布教や、読経などの佛教儀礼はもとより、前述にあるように、附屬教育部や、その他のさまざまな活動から成り立っていた。「余が目下の事業たる何分此大區域地に在りて、漸く一名の駐在勤務なれば、計畫通り事業をして十分に進歩せしむる能はざるも、定期説教として毎月第一日曜及十五、二十八日三回を開き、其の外機會を得れば、地方巡教として本港を隔て、三四百里内外の各都邑に出張布教を試み、已に本月も馬來半島の舊都コーランボー府日本人設立厚德會の招聘に應ぜしが、余は其當時盛大な歓迎を請けたり」といい、また教育部は「教誨の傍ら日々六時間づゝ四十餘名の邦人、支那人等の男女の子弟を預かり諸種の學課中邦人には重に英學、支那人には加ふるに邦語學を以てし、妻は専ら裁縫の一課を擔任せしむ夜學研究生亦數名を存する爲め、實に晝夜忙殺さるゝ計にて、佛陀洪恩の萬分の一を報ぜざる可けんやと……」⁽²⁶⁾と仕事の内容を紹介するとともに、法務の合間を縫って英語・日本語などを教えていたことがわかる。

本願寺文學寮で佐々木千重の後輩であった清水黙爾は、インド・ネパールへの留学途中シンガポールに立ち寄っているが、当地で佐々木に世話になっている。佐々木の記事は「久しぶりに家の中に寝た、船中の苦痛とは雲泥の相違である……日本人の家は百軒には足らない、夫でも布教者が熱心に布教をすると、仲々善く世話をなさうだ。日本人の中では佐々木君の盡力で、共濟會といふ毎月廿五錢掛の會が出来て居て、會員が、死ぬと、五十圓の葬式料を會から呉れるので、立派な葬式が出来さうだ……佐々木君は、朝は八時から午後二時まで小學校風の教授をなし、夜は七時から十時頃まで日本の青年に英語を教授されて居る。毎月第一の日曜日に説教がある。令閨は、日本の若い婦人に裁縫を教授されて居る。夜和洋兼帯の料理を喫しながら、文學寮時代の無邪氣な生活の懷舊談やら、同窓の友人の變遷の談に時の移るのも知らなかった」と記している⁽²⁷⁾。

(2) その後の本願寺

シンガポール本願寺布教所開設に尽力した佐々木千重は、生涯海外開教に関係することとなったが、佐々木氏以後本願寺から派遣された僧侶の記録は『海外開教要覽』に少しあるだけで、正確とは言い難い。というのは、戦前のシンガポール日本人社会を鳥瞰した『南洋の五十年』には本願寺についての記載がほとんどなく、記載されている僧侶名は『海外開教要覽』には記載されていないからである。その『南洋の五十年』を見てみよう。「明治三十八年本願寺から太田周教師が派遣され、布教の傍ら熱心に兒童教育等にも力を盡して居られたが機縁熟せざり

しものと見へ布教所を開設するに至らず間もなく歸朝され暫く其儘となつてゐたのが、大正四年桑野淳城師來星ベンクレーン街に眞宗教會創立六年愈々本願寺出張所となり婦人會も出來て何事にも奔走してゐたのであるが、同師歸朝後中村順三師時代、經谷某別に布教所の看板を掲げ信徒も亦分裂して見憎い宗門の恥を曝してゐたのであるが、渡邊師統一融和の任を帯びて來星し、再び、兩派を併せて布教所を擴張し現在のところに移轉し、同師歸朝後井上師一時主任を代理し現在の清水師に及んで居るのである」⁽²⁸⁾との記述がある。しかし『海外開教要覽』には、太田、桑野両氏の名前は記載されていない。シンガポール本願寺のいざごは佐々木千重の時代からもあったようである。「譯も分らざる偽稱肩書を持して日本西本願寺天下佛教有信講總代何々杯言觸らし大々的名刺を以て、當地方を横行せし僧侶四五年前此地に顯はれ、直に僧にはあらで密航婦誘拐者なりとのこと露顯し、或地に説教眞最中に一婦人より袈裟を剥ぎ取られし、大惡無慚の者、其外復た西本願寺南洋宗教視察員某と云ふ、嘘八百の或賽錢主義の僧一時讀出して何時も西本願寺を擔ぎ出されしは、尤も驚き且つ余に大に困難を與へしが、爾來此種の妖僧漂着滅滅し、些しく日本佛教の聲價回復し來りたるを以て、余は時々日本本願寺傳道の行動に付、當地タイムス新聞に投書するに近來稍々世の耳目を惹く緒に付けり……」⁽²⁹⁾とされているように、本願寺にとっては迷惑な話であるが、前述したようにお家騒動がたびたびあったのであろうか。

(3) 昭南本願寺

シンガポールは、イギリスのアジア経略の一大拠点であった。ただ日本の大東亜共栄圏の建設や南進論により、日本軍はマレー半島からシンガポールを窺う形勢となってきた。イギリスは ABCD 対日包囲網あるいは対日資金凍結などでマレー及びシンガポールを死守し、その結果としてシンガポールから多くの在留邦人が日本に引き上げ始めた。本願寺とて例外ではなくて、1941（昭和 16）年 6 月には最後の輪番清水祐博師が引き揚げた⁽³⁰⁾。その後日本軍は、佛印進駐やマレー攻略を経て 1942（昭和 17）年 2 月にシンガポールを陥落させた。宗教界においては、日本国内はもとより、満州においても盛大に新嘉坡陥落記念法要などが厳修された⁽³¹⁾。シンガポールは名称も昭南島と改められ、大東亜共栄圏の南方における一大拠点とされた。この結果、引き揚げていた本願寺もまた引き返してきたのであった。いつ引き返したかは明らかではないが、後述の本願寺日本語塾は 1942（昭和 17）年 11 月には開校しているので、おそらくそれ以前に再興したのであろう。『本願寺新報』には「現地軍民の熱意で昭南島本願寺復活」という大きな見出しとともに、喜びの記事が掲載されている。「敵國イギリス東亞侵略の牙城であつたシンガポールは、いまや日章旗翻へる大東亞南方圏の最大據點たるべく再生の息吹も強く整備建設に邁進しつつあるが、このほど軍の非常なる好意により昭南島本願寺がここに力強く復活されることになつた朗報がもたらされ當局をはりきらしてある。本願寺が明治三十二年にシンガポールに出張所を開設し、爾來在留民の精神的中核として重要視されてをり、清水祐博氏が大東亞戦の直前、最後の便船で引上げるまで在留民のため努力してきたところであつてシン

ガポールが昭南島となつた今日、本願寺の復活が現地在留民からも熱望されてゐた折柄、軍の非常なる好意もあつて本願寺が再現されることになつたのは限りなき喜びである。今度開設される地は市街を脚下に望むオークスリーライズの高地で宏壮なる建物に本願寺の御本尊竝に須彌壇佛具等に移し、英靈奉安所の供養、軍隊病院への慰問法話、軍人に對する精神的休養所、日本語學校の經營、戦争のために生活力を失へる在留邦人の更正援助等の事業に乗り出すことになつた。尚本派關係の某軍人は昭南島に入るや直に前本願寺を訪れたが空屋で寂寥を感じてゐたところ、その後本願寺の移轉を知り、早速オークスリーライズに往くと丘の上に堂々たる本願寺があり、しかも英靈奉安所として護衛されてあるをみて驚喜し、開設已來四十餘年間、イギリスの壓制下にあつた在留同朋の力となつてきた本願寺が大昭南島誕生と共に酬はれていま日本領土の最南端に大本願寺が再現された喜びを頼りにしてゐた」⁽³²⁾とされている。「軍の好意」で復活でき、また英靈奉安所が護衛付きで境内に建てられたということがわかる。これはまた本願寺と軍の關係が尋常ではなかつたということであろう。

(4) 昭南本願寺と日本語學校

昨年の12月に初めてシンガポールを訪問したが、多忙な合間を縫ってシンガポール・フォード自動車工場記念館内で「昭南時代—シンガポール陥落3年と8ヶ月—」という展覧会を參觀する機会を得た。その中に昭南本願寺の日本語塾の成績証明書と学生証が展示してあつた。当然のことではあるが、日本語を勉強するのは、日本人以外のシンガポールに住む中国系やマレー系、或いはインド系の人たちである。では何故本願寺が彼らに日本語を教えるようになったのか。その昔、本願寺がシンガポールに布教活動を行ったときには、日本佛教を弘めようとする心意気からマレー語での布教活動とともに、日本語を教えることによって日本佛教や日本を理解してもらうという目的があつたように思える。その後、シンガポールが昭南島と名を変え、日本の軍政下に組み込まれ、昭南島の人々に日本風の教育を施し、日本文化を強制的に教え込んだ。このことは南洋での支配権確立とともに皇民化教育を徹底させたということにほかならない。そのために日本語を徹底的に教え込むということを行ったのである。そのお先棒担ぎが、まさに本願寺に課せられた使命であつた。本願寺にしてみれば、当地において日本語教育の歴史があつたので、簡単に引き受けたのであろうか。「南方文化工作と軍の態度」という座談会の中で、陸軍報道部員陸軍中佐堀田吉明は、宗教問題について以下のように語っている。「今軍政施行時期に於いて、軍はどういふ考へで宗教を取り扱つてゐるかと申しますと其の爲には南方の特性を能く見極めなければなりません。大體南方は文化の程度の低い原住民が多く、宗教心は旺盛であることは御存知の通りであります。随つて宗教を通じて民心を把握する、かういふ點に特に重點を注ぐ必要があります。即ち宗教を通じて南方の民心を日本軍信頼、皇國信頼といふところに取敢へず集中していくといふことが一番基礎になる。民心が離反しては何も出来ません。それにはどうしても宗教を無視するわけには行きません。この點には十分注意されまして戦の初めのあの方面に對しましては、軍に附隨する文化工作に任ずるところの報道、

宣傳或は宣撫といふやうな方面に宗教家の方に出て戴いて居ります……」⁽³³⁾。まさに宗教を通じての宣撫工作を本願寺が請け負っているのである。勿論この座談会には本願寺からも本願寺東京出張所長（おそらく今で言えば築地本願寺輪番，東京教区教務所長であろうか）の朝倉曉瑞が出席している。さらに日本が推進した「大東亜共栄圏」構想にもなつて、1942（昭和17）年2月に「大東亜建設審議会」が政府内に設置された。この年5月21日に行われた審議会における議論を少し見てみよう。第二部会（文教政策）の部会長であった文部大臣橋田邦彦が第二部会における審議の経過を報告するが、その中に「大東亜建設の精神的基礎ハ日本世界観デアリマス。従来大東亜各地ニ勢力ヲ持ツテ居リマシタ米英的世界観ヲ排除シマシテ、日本世界観ヲ根柢トスル大東亜文化ヲ樹立シナケレバナラナイノデアリマスガ、我が國ニ於テモ従来諸々ノ學問ハ外來文化ノ輸入ヲ必要トシマシタ結果、必ズシモ日本世界観ニ基イテ居ツタトハ言ヘナイノデアリマス。歐米思想ヲ其ノ根柢ニ持ツ如キモノモ少クナカツタノデアリマス。其ノ爲國民ノ中ニハ往々我が國本來ノ姿ヲ見失ヒ、思想ノ動搖ヲ來シタモノモ少クナカツタノデアリマスルガ、今日大東亜建設遂行ニ當リマシテハ、斯カル事態ハ斷乎トシテ是正スベキデアリマシテ……従来流通シテ居リマスル歐米語ハ成ルベク速カニ之ヲ廢シ、大東亜ノ共通語トシテノ日本語ノ普及ヲ圖ルト云フ根本ノ點ニ付テハ御意見ノ一致ヲ見タノデアリマス……」⁽³⁴⁾と述べ、日本中心主義・日本語中心主義を鮮明に現している。となれば、大東亜共栄圏に属するいわゆる占領地における教育は、日本語を第一言語にして行われることは疑いがない。本願寺の前法主大谷光瑞も「大東亜建設審議会」委員であった。彼は橋田の説明に対して「此ノ歐米語ハ成ルベク止メサセルト云フコトハ、私共第三部會デモ申シテ居ル、大賛成デアル、サウシナケレバナリマセヌガ、文字ト云フ點ニ付テ何モ言及シテゴザイマセヌガ、文字ハドウ爲サイマスカ、日本ノ假名ヲ以テ御ヤリニナラレルノデゴザイマスカ、或ハ又羅馬字ヲ併用する御積リデゴザイマスカ……」⁽³⁵⁾と質問をしている。この質問に答えて橋田は「文字ニ付キマシテハ只今御話ノ通り色々考究スベキ問題ガアラウト存ジマシタガ、根本ノ方針ト致シマシテハ、我國ノ假名ヲ使用セシムルト云フコトヲ一般ノ方針ト致シテ居ルノデアリマス……」⁽³⁶⁾と答えている。さらに大谷光瑞の所属する第三部会（部会長小泉親彦厚生大臣）では、「而シテ領土タルベキ地域ニアル多民族ニ對シマシテハ、今ヨリ直チニ之ヲ日本化スルノ方策ヲ大イニ講ズルノ必要アルベク、是ガ爲ニハ速カニ日本語ノ普及ヲ徹底スルコトガ極メテ肝要ナリトノ意見ガ、殆ド各委員ヨリ有力ニ開陳セラレテ、一致シタ御意見デアツタノデアリマス……」⁽³⁷⁾と報告している。これによって日本の大東亜共栄圏内における日本語教育の重要性が確かめられたのである。前本願寺法主大谷光瑞が大東亜共栄圏において日本語教育を推進する諮問を提出したわけではないだろうが、当時の『中外日報』や『本願寺新報』には、昭南本願寺の日本語教育を伝える記事が散見される。「馬來の地昭南島に唯一の佛教寺院として特殊の活動をしている昭南島西本願寺から最初の報告が寄せられた。同地住民のもっとも希望する日本語学校はこの四月一五日からすでに開設され、一ヶ月を一期とし四期で修了する制だが、七月末現在で一三八四名の生徒が押しかけている。この日本語普及のためと最も手っ取り早く『日本』を理解さすため本願

寺が思い切って『日本の馬來』といふ劇を昭南劇場でこの日語學生二〇名を俄に動員して演じたがとても成功であったと、なほ日語學校が機縁でドンドン職業紹介などもするのでさらに學校以上の役目も果たしているといった調子である」と報じている。更に「この日語校はもとより臨時のものだが將來は本格的な學校経営も考へている」⁽³⁸⁾や、「昭南島の本願寺日語塾大もて 街に漲るアイウエオ歌」という見出しで「日本になつただから日本語を勉強しよう、そして日本のお手傳いをしよう、現地住民の協力意識の現れは日本語學習運動となつて全マレー、スマトラに漲つてゐる、去る一日から一週間を最初の日本語普及運動週間として軍〇〇班をはじめ關係各機關の後援を得て各地に大々的な日本語學習行事が展開されてゐる。

【その一】從軍僧川崎榮城師(36歳)、岡本泰雄師(32歳)が眞先に開いた西本願寺日本語塾、四月十五日開校當時の十九名が一ヶ月半の今日では六百名を突破、クアラ・ルムプール生れの助手岡本春子さん(22歳)さんを加へた三人で晝夜に分けても到底収容しきれず毎日殺到する入塾申込者の處理に悲鳴を擧げてゐる始末だ。入塾志願者の種族は勿論年齢、階級等雑多を極め、月謝を千圓拂つてもよいから特別授業をして呉れといふインド紳士もあれば、その日からボーイに使ひながら教へて呉れといふ僑生もゐる、ところで困るのは教科書の問題だ、とりあへず川崎先生編になるガリ版刷りの教科書で、中級組はもう立派な國民學校五、六年生になつた程である。去る一日からこの塾生の日本語芝居「ニッポンゴノシケン」が昭南劇場で行はれてゐる。強い日本の兵隊さんへの御恩返し的一端にと優しい彼等の慰問譜だ。

【その二】六月一日を期して昭南市内廿二ヶ所に横三間、縦二間といふ大ポスターがたてられて市民の度膽を奪つてゐる。これは軍〇〇班の考案になる繪と文字と発音のポスターである、各新聞も一せいに日本語欄を設け連載してゐる、歌の方では愛國行進曲が王座を占め廿七日の海軍記念日に海軍軍樂隊が作曲したアイウエオ・ソングが正しい日本語の発音を歌を通じて覚えられといふので目下盛んにうたはれてゐる」⁽³⁹⁾。このように本願寺は軍の後援のもとに日本語學校を開き、多くの學生を集め、盛んに日本語と日本文化を喧伝していくのであった。一ヶ月半で元來19名であつた日本語學習者が600名を突破したというのは驚き以外なものでもない。如何にシンガポールが日本の軍政下に入り、昭南島と名前を変えても、どうしてこれだけ多くの人が敵國日本の言葉を学ぶのであろうか。前述した大東亜共榮圏における日本の方針がその重要な事項であるといふのは言うまでもないが、政策だけでは理解できない点もある。一般市民の偽らざる行動様式は日本語を学ぶことによって次のビジネスチャンスが多くなり、仕事を選択する幅が広がるということがあつたと考えられる。シンガポールに在住する日本人以外の人々にとっては、シンガポールは多国籍多民族で構成されており、自分のルーツを探ることはあつても、アイデンティティを考えることは難しい問題である。このような状況のなかで彼らは自分たちの支配者は自分たちで決めることができないという状態が永く続いた。換言すれば従來からの支配者であるイギリスに代わつて日本が支配者になつたのである。勿論私の言は勇敢にイギリスや日本の圧政下にあつて権力と戦つた人たちにとっては到底承服できない言葉であることは十分承知してゐるが、ここでは一般民衆は占領下のもとでは「食べてい

く」ことのほうが最大にして最高の関心事であったということである。本願寺の日本語塾やその他の日本語学校が隆盛を極めたのはそのあたりが関係しているかも知れない。ではその結果としての日本語習得はどうであったのだろうか。小島勝氏は「日本語と日本精神を徹底して鼓吹することにした。多くは二十歳代のマレー人であったが、六ヶ月間の訓練をくり返し、……徹底したスパルタ教育を実施したという……『君が代』を歌わせ、教育勅語を唱和させ、柔、剣道を教えた。また土俵を作って相撲を取らせ、日本式の田植えもやらせたという。畳の部屋も作った……しかし訓練生はこうした処遇に憎しみを抱くどころか、「彼らは本当に日本のために命を捧げるというところまで精神的に成長した」という。イスラム教の信仰生活に干渉せず、現地の料理を食し、同じベッドに寝たこともあり、「現地人の中に飛び込んだ」ことが訓練生との心のつながりを確かなものとした。訓練所の教官が10人ぐらいつつ受持ち「生活」を共にする中で徹底した「心をこめたスパルタ教育」をしたという。「半年で日本語会話の力がみるみる上達し、教科書のような書いたものでは追いつかないほどであった」⁽⁴⁰⁾と記されているが、これは特異な例であったかも知れない。1943（昭和18）年の末になると、昭南市政府の命令ですべての科目は日本語で教えられることとなり、また学生は日本の国歌やその他愛国歌曲を唱わされると同時に日本の祝日を祝い、また身体を曲げる角度（挨拶をするとき）まで教えられたのである。しかしながら、一部の学生たちは英語の勉強を秘密裏に引き続き行っていたという⁽⁴¹⁾。

(5) 大谷光瑞とシンガポール

「不肖は京都のサバズシを、伊豆宇鉢店に命じ、十四日の後シンガポールに於いて食せり。素より船中は冷凍せりと雖も、店主の妙技はその味を、十四日以後に適當ならしむべき鹽度と壓力を加へしなり。不肖の経験せしは十四日なれ共、恐らくは更に長時間に堪ゆべし」⁽⁴²⁾と大谷光瑞は語っているが、そのことはとりもなおさず光瑞とシンガポールの関係の深さを示すものであろう。

大谷光瑞（1876～1948年）は、本願寺21世大谷光尊の長男として、京都に生まれた。大谷探検隊で知られるが、孫文との交流や中国や南洋にも非常な関心を示した。内閣顧問、内閣参議、大東亜建設審議会委員などを務めた人物である。大谷光瑞と南洋の関係を示すものとしては、光瑞側近の原田了哲氏が雑誌『大乘』誌上に「猯下は、世界中をまわって、いつも、日本がいかに弱国であるかを、知っており、いつも憂いておられた。そのくせ、元気のいい開戦論をぶつこともあった。こんなでは負けると知りながら、矛盾に平気であった。やはり、南の方がよほど好きだったのであろう。つとに南洋方面には研究をすすめておられた。私は猯下と一緒に、マライのゴムや米を視察したり、ジャワ、スマトラの地質調査をやって、強くそのことを印象づけられた。ミンダナオでは、某アメリカ将校に夕食をよばれた際に『原田、ここにわしの別荘を建てることにしようか』とささやいていたずらっぽく笑っていた。あるいは本心だったかも知れなかったのだ。木曜島方面には尊由氏（1886～1939年、大谷光瑞の実弟、1937

年近衛内閣の拓務大臣を務めた。後内閣参議，北支那開発株式会社総裁などを歴任（引用者）をやり，真珠貝に関する調査をさせられたが，その尊由氏すら『よくみておけよ，いずれはもろうからナ』と呵々大笑する始末で，何も知らぬ私など返答にこまった。ボルネオでは，私は，土地の状態をくわしく調べ，日々，日記につづり尊由氏が，その日記の上に，じつにくわしいスケッチをつけ加えられていた。この日記は，後，海軍省に，それから陸軍省にまき上げられ，行方が今だにわからずになった。狛下のことだから，これら南洋に日本人をうつし，新しい日本を建設する考えでもあったのかも知れない。あつてもいゝのじゃなかったかと思う。しきりに日本の人口問題を研究していられたから」と記している⁽⁴³⁾。『鏡如上人年譜』によれば「大正六年（一九一七）二月中旬南洋へ渡航する」，「是年蘭領印度農林工業株式会社をジャヴァ島スラバヤ市に設立，最初セレベス島メナドに根拠し，大森林の開拓に着手したが，その後中止し，主力をジャヴァに集注し，農園の経営を初む」⁽⁴⁴⁾とある。これらの記述からも伺えるように光瑞と南洋の関係はかなり深かったものと思われる。大谷光瑞が初めてシンガポールを訪れたのは，1899（明治 32）年のことであつた。インド佛跡巡拝とヨーロッパにおける宗教制度の研究のためにイギリスに向かう途中に立ち寄つたのである。本願寺の新門時代あるいは法主時代さらには隠棲時代と，その後何回もシンガポールには立ち寄っているが，当地本願寺との関係は不明である。第二節で触れたように，当地本願寺のお家騒動などが，光瑞の足を遠ざけたのかも知れない。光瑞は当地での滞在にはほとんど三井物産の支店長宅に投宿している。彼の関心事はシンガポール郊外に買ったゴム園のことであつたかも知れない。因みに『鏡如上人年譜』によると，「大正五年（一九一六）八月中旬，シムラ滞在中心臓炎を病み，治療のため大連に向はんとしてカルカッタに出で是日セイロン丸にて出航す，柱本瑞俊ピナンまで出迎へ，新嘉坡に達し，次いで上海に至る。この頃新嘉坡に農園を経営し，ゴムの栽培をなす（大正七年まで継続）」⁽⁴⁵⁾とあるが，大正 5（1916）年のシンガポール在留邦人中に「栽培 大谷光瑞」⁽⁴⁶⁾という名があり，シンガポール，スマトラ，ジャワを中心として動き回ろうとしている大谷光瑞の姿が見える。法主引退後，自由人としての面目躍如というべきであろうか。さらに日本人ゴム園調査及び番付表の中に，前述した柱本瑞俊⁽⁴⁷⁾の名前が見える。番付は前頭で 1400 斤の生産高であつたという。柱本のゴム園はシンガポール郊外のライジンサング園というところで，創業は大正 5（1916）年，既成園買収とある。資本金は 6 萬圓，持ち主は柱本瑞俊であるが，「西本願寺前法主大谷光瑞師の殊寵を受く，年少氣鋭の事業家なり，新嘉坡市ビキクトリア街花屋旅館内假事務所」という紹介文が記されている⁽⁴⁸⁾。柱本は光瑞の側近であつたので，光瑞のゴム園の経営を実質上任されていたのであろう。

おわりに

「近代以降，敗戦までにアジアの地に展開された日本佛教の伝道活動は，侵略に加担している」⁽⁴⁹⁾と木場明志氏は語っているが，まさに近代以降（ここでは当然ながら明治以降を指すも

のと思われる。海外開教は明治以降、日本の対外膨張政策にともなって積極的に行われると言う歴史的事実がある)の海外開教は軍部の海外侵略と軌を一にしている場合が多い。場合によっては軍部の海外侵略の先鞭役を果たしているものも少なくない。ただ、たんに軍部の侵略の補完とか、協力と言う形で全てを収斂して行くことは、本来佛教の持っている教えとか教えに付随する役割と言うものを見落としてしまう可能性も孕んでいることに注意を払う必要がある。たとえば、慈善事業や教育活動(皇民化教育については、佛教の持つ慈善福祉的な教育と分けて考える必要があると思われる)などがあげられよう。これらの活動をすべて否定していくことは、佛教を媒介とした人間の精神的な営みまでも否定していくことになるので、この面は一つの文化活動として考えて行きたいと考えている。

大谷光瑞を中心とする本願寺の対外開教活動(大谷光瑞個人としての活動か、あるいは本願寺の活動として大谷光瑞がその中心的な役割を担ったのか)については、今後の研究の成果を俟ちたい。また、このように分けることに意味があるのかどうかについても、まだ私なりの整理はついていない)は、北はウラジオストクから朝鮮半島、中国、台湾をはさんで、南はフィリピン、インドネシア、シンガポールまで及んでいる。本願寺の活動拠点はウラジオストクが1896年に布教所を開いたのを嚆矢として、韓国の釜山(1892年、釜山の場合は釜山旧公園地を買収し、仮布教場を設けた)、中国大連(1904年)、營口(1905年)、青島(1911年)、上海(1906年、ただこの年より前に本願寺の上海布教は始まっていた)、台湾(1896年)、廈門(1899年)、香港(1900年)、シンガポール(1898年)など日清、日露戦争前後にアジアの主な港湾都市を中心に本願寺は別院や布教所、出張所を次々と作っていった。ヒトが集まれば、モノも集まる。そして何よりも情報が集まるのである。こうしてヒト、モノ、情報の流れを大谷光瑞あるいは本願寺は掌握していたのであろう。「国家の前途」を常に考えていた大谷光瑞にとっては当たり前の選択であったのかも知れない。

注

(1) 清水黙爾『紫風全集』鷗聲堂書店、1907年、246頁。清水黙爾(1875～1903年)は、島地黙雷の次男として、東京に生まれた。1894(明治27)年5月本願寺文学寮に入学し、1897(明治30)年4月文学寮高等科を卒業。その後本願寺よりインド遊学を命ぜられる。明治35(1902)年、大谷光瑞率いるインド探検隊に加わり、ネパールの深林を跋涉する。その後ベナレスで梵学の研鑽に励むが、病に冒され、当地で死去する。28才であった。

(2) ASEANセンター編『アジアに生きる大東亜戦争 シンガポール編』展転社、平成3年、17頁。

(3) 『東南アジアを知る事典』平凡社、1986年。

(4) 矢野暢『「南進」の系譜』中公新書、1975年、53～55頁。

(5) シンガポール日本人会編『戦前シンガポールの日本人社会』2004年、14頁。音吉については、『朝日新聞』2005年2月21日に以下のような記事がある。「音吉、173年ぶり美浜に 遺灰を埋葬 江戸時代に遭難、鎖国で戻れず」

「音吉よ、よく帰ってきたー。江戸時代末に乗っていた千石船の遭難でアメリカに漂着し、鎖国で帰国が認められないまま、日英和親条約の英国側通訳として活躍するなどした美浜町出身の船乗り、音吉の遺灰が20

日、地元住民が和太鼓の演奏などで出迎える中、客死先のシンガポールから173年ぶりに帰郷した。遺灰を持ち帰ったのは、町民らでつくる『音吉顕彰会』（会長・斎藤宏一・美浜町長）。一行は、音吉の妹の曾孫に当たる山本準治さんを含む120人でツアーを組み、中部空港が開港した17日にシンガポールへ出発、現地で分骨式をした後、20日午前8時過ぎに中部空港に戻り、その足で美浜町へ帰ってきた。地元では、遺灰の帰郷を知った住民が、音吉が世界最初の聖書の和訳に貢献したことを記念する同町小野浦の記念碑前で和太鼓を演奏、江戸時代末に千石船を模して建造された祭礼用の『船山車』も特別に引き出して音吉の帰郷を歓迎した。遺灰は、この後、近くの良参寺にある音吉と一緒に遭難した船乗り計14人の共同墓碑の下に埋葬されたが、参加者は一人一人線香を手向け、感無量の表情。斎藤町長は『これを機会に、音吉や音吉の子孫のさらに新しい資料が見つければ』と話した。音吉は天保三年（一八三二）に遠州灘で遭難、慶応三年（一八六七）に満五〇歳で亡くなった。遺灰は、昨年一月、シンガポールで見つかった骨壺に残っていた歯などを火葬した。

(6) 前掲『戦前シンガポールの日本人社会』19頁／『福沢諭吉全集』第19巻、岩波書店、1971年、11頁。

(7) 藤井宣正（1859～1903年）は、新潟県与板村に生まれる。長岡中学卒業後、島地黙雷に師事し、佛典を学ぶ。1891年東京帝国大学を卒業。本願寺文学寮の教授となるが、97年に辞職する。その後、大谷光瑞のインド佛教遺跡調査に参加したが、翌年フランス・マルセイユで客死した。石黒秀一『大谷探検隊の藤井宣正』私家版、1998年／拙稿「インド仏跡調査に心身ささげる」（『新潟日報』1997年12月2日）参照。

(8) 藤井宣正『愛操全集』鶏聲堂書店、1906年、452～453頁。この発行元の鶏聲堂書店は新佛教改革運動を起こした高島米峰の経営する書店である。清水黙爾『紫風全集』も高島の編集にかかるものである。なお高島も新潟県出身であり、晩年には東洋大学の学長を務めた。

(9) 西村竹四郎『在南三十五年』安久社、1936年、19～20頁。

(10) 『紫風全集』242頁。

(11) 清水洋・平川均『からゆきさんと経済進出—世界経済の中のシンガポール—日本関係史』コモンズ、1998年、26頁。

(12) 同上書、30頁。

(13) 同上書、32頁。

(14) 『南洋の五十年』南洋及び日本人社、1938年、137頁。

(15) 樋口・勝・川田編『シンガポール日本人墓地』シンガポール日本人会、1983年、8頁。

(16) 前掲『南洋の五十年』510～511頁。

(17) 前掲『シンガポール日本人墓地』1983年、9頁。なお日本人墓地の管理にあたった「共済会」と、佐々木千重たちが葬式費用の負担を軽減するために作った「共済会」が同一のものであるかどうか不明である。

(18) 同上書、10頁。

(19) 『教海一瀾』第96号、明治34年4月。

(20) 『海外開教要覧』（西本願寺海外開教要覧発行委員会、1974年）には、「日清戦争後国力の著しい発展にともなって、南洋の各国々に出向く日本人の数も多くなった。特に香港、シンガポール、マニラには、それ以前からの移住者も多く、またフィリピンのベンゲット道路工事のために多数の邦人が渡航し、病魔にたおれるものが数知れなかったと云われ、その生存者がミンダナオ島ダバオに渡ってマニラ麻栽培に従事し、成功者が多く、日本仏教の進出が望まれていた。こうした状況の中で明治29年10月佐々木千重が山命によってオーストラリア及び南洋各国の視察を行い、また明治31年6月には土岐寂靜、朝倉明宣を香港、シンガポール、セイロン等に開教視察使として派遣した。その結果同年11月にはセイロン仏教靈地協会から仏教再興運動を本山に請願するところがあった。明治30年2月佐々木千重は木曜島で伝道を開始したが、結実を見るに至らず、よって32年シンガポールに赴き佐々木芳照とともに伝道を開始し、同年8月にはヴィクトリア街に布教場を設置した。それははじめ日本人子弟の教育を兼ね行方場所として僅堂を設けたものであったが、その後明治33年1月には洋館二階建ての布教場兼学校の建築を見ている」とある。また不幸にして土岐師は途中病に斃れ、現地（セイロン島）で亡くなっている。彼らの様子を伝える記事が『教海一瀾』

に残されている。シンガポールの様子を伝えているので、長くなるが引用しておく。「此の如く一行は六日の航程を経て、二十七日午前五時半に新嘉坡に着したり。二氏は同地視察の要あれば直ちに上陸す、同船の人も上陸する者ありき、二氏は同港海岸にある本邦人の業に屬する日新館と云える旅館に投じ、暫時休憩の後ち、帝国領事館を訪へり、領事森川四郎氏懇懇に接遇し、諸種の質問に答ふ、二氏は在留日本人の状態、および今後發達の豫期、領事の在留人其他に關する意見、宗教上に於ける考案等に就て談話して歸宿したり、時に土岐氏病氣治せず、在留本邦醫三根英二氏の診察を受けたるに右下腹部に於ける塊は稍や太り、桃實大なりたり、故に病體にて他の診察を為すに苦み、朝倉氏亦た氏に離るるに由なく、主として療病に努めしめたりと。此地に在留する日本人約六百名、而して其の四分の三は醜業婦に屬す、其他は官吏、貿易商、旅宿業等の者なり、當地には三井物産會社出張店あり、澁谷商店、乙宗商店と名くるあり、日本雜貨室内粧飾品等を売る、旅宿には日新館及び松尾旅館あり。當地には支那人過半に居れり、ジャワ渡來のマライ人及び印度人等他の一半をなせり、在留の西洋人は余り多くはあらざる趣なり、基督教會は例に依て處々に見ゆ、其會堂の數三四も在りしと覺ゆ、當地には豫ねて本派の僧侶佐々木芳照氏の留學せるありて(氏は大阪教区管事佐々木鴻熙氏の嗣子)旅寓に訪ひ來れり、氏は昨年四月より此地に私費留學を爲しマライ語學校に於て語學を研究し、傍ら在留日本人の爲に讀書習字數學を受けつつあり、氏の語學研究は將來に記する所あるを知らしむ、一行も氏の在留せるありて、大に視察上の便を得たりと云へり」(『教海一瀾』第 27 号)とある。この記事によると、本願寺派の佐々木芳照師が當地に私費留學し、在留日本人のために読書、習字、数学などを教えていたという。さらに將來に備えて語学の研鑽に努めていたとされている。

(21) 拙稿「大谷光瑞と上海」(小島勝・馬洪林編『上海の日本人社会』永田文昌堂、1999 年) 83 頁。

(22) 本願寺史料研究所『本願寺史』第 3 卷、1969 年、423 頁／拙稿「大谷光瑞とウラジオストク」(浦潮本願寺記念碑を建立する会『浦潮本願寺記念誌』2001 年)。

(23) 高輪同窓俱樂部『高輪同窓俱樂部名簿』1927 年。高輪同窓俱樂部というのは、高輪中学、高輪商業の同窓會が合併して出來た組織である。本願寺文学寮が廢され、新たに東京に高輪仏教中学、高輪仏教大学が設立されたが、その流れを受け継ぐ学校として、高輪中学、高輪商業などがある。

(24) 前掲『海外開教要覽』240 頁。

(25) 前掲『教海一瀾』第 96 号、明治 34 年 4 月。

(26) 前掲『教海一瀾』第 96 号、明治 34 年 4 月。

(27) 前掲『紫風全集』242 頁。

(28) 前掲『南洋の五十年』512 頁。

(29) 前掲『教海一瀾』第 96 号、明治 34 年 4 月。

(30) 『本願寺新報』第 942 号、昭和 16 年 10 月 25 日。

(31) 『中外日報』昭和 17 年 2 月 17 日付けによると、西本願寺では日本軍のシンガポール入城式当日に報国法要を厳修するとされ、また東本願寺では、同じく当日に大谷光暢法主直修のもとと戦捷報国法要を厳修し、一山全役員は護国神社参拝、両堂白洲の前で万歳三唱する。知恩院は、宮内大臣に電報を打ち、陥落記念法要を修する。天台宗では陸海軍大臣に感謝の電報を打ち、祈願會を修し、大日本仏教會も東京築地本願寺で法要を行うとされている。また龍谷大学では、本館前広場において式を行った。また『朝日新聞』昭和 17 年 2 月 19 日付けによれば、「戦勝祝賀の十八日午後二時から大日本佛敎會、東京佛敎敎團共催のシンガポール陥落祝勝奉告大法要が築地本願寺で執行された。とくに京都から大谷光照法主が上京して本法要の導師となり、東京市内各派僧侶六百餘名が参列、大東亞戰に敵斃した護國の英靈に對し、嚴肅な感謝法要を行った」とある。このようにして日本の佛敎敎團は戰爭に協力する体制を取っていったのであった。さらに、『中外日報』昭和 17 年 2 月 28 日号においては、「滿洲國佛敎總會新京支部では、協會會首都本部講演の下に去十九日午後二時新京特別市大同大街の東本願寺に於て新嘉坡陥落感謝大法會を藤岡輪番導師のもとに厳修された……」とある。

(32) 『本願寺新報』第 965 号、昭和 17 年 6 月 15 日。

(33) 『中外日報』昭和 17 年 7 月 28 日号。

(34) 『大東亞建設審議會關係史料』第 1 卷(『南方軍政關係史料』23、龍溪書舎 1995 年復刻) 52 頁。

(35) 前掲『大東亞建設審議會關係史料』第 1 卷、59 頁／石井均「大東亞建設審議會と戰爭初期の対南

方教育政策」(『軍事史学』第111号, 1992年)。

(36) 前掲『大東亜建設審議会関係史料』第1巻, 59～60頁。

(37) 同上書, 79頁。

(38) 『中外日報』昭和17年8月27日号。

(39) 『本願寺新報』第966号, 昭和17年6月25日。昭南島での学校教育は, 日本軍の占領直後は徹底した日本語教育は行われていなかった。『読売新聞』昭和17年4月26日付けには, 「本月初旬開校されたマレー人, 印度人の各學校に引續き廿五日英語學校廿八校が開かれ, さらに廿七日には支那語學校廿五校が開校の豫定で, これで昭南島の初等教育施設は一應全部戦前の姿に回復する」とある。本願寺以外の日本語教育施設については, 『朝日新聞』昭和17年8月19日付け紙面「南方から銃後へ 日本語がお上手 昭南島の子どもたち」という記事があり, また同年11月25日, 26日付け紙面において「南方日本語普及の一年 原住民の要望」として神保光太郎氏の「昭南日本語学園」訪問記が寄せられている。また『読売新聞』にも1942(昭和17)年12月16日から18日にかけて, 陸軍派遣作家水木洋子氏による「昭南の日本語学校」(上)(中)(下)が掲載されている。昭南島で唯一の模範的日本語学校である「軍政監部国語学校」の訪問記である。このようにして文化人や作家などを動員して, シンガポールにおける日本語教育の実態を日本国民に知らせることによって, 海外での日本語教育のあり方を示したものであった。

(40) 小島勝「戦前アジア地域における本願寺派開教使の日本語教育」(『佛教文化研究所紀要』第26集, 龍谷大学佛教文化研究所, 1987年) 32頁。

(41) 『昭南時代 新加坡陥落三年零八ヶ月展覽図集』新加坡国家档案馆, 157頁。奥付に日時記載はないが, 英語版 National Archives of Singapore, *The Shonan Years; Singapore under Japanese rule, 1942-1945*, は2005年の発行である。おそらく英語版を中国語に翻訳したものと思われる。

(42) 大谷光瑞「食」(『大谷光瑞全集』第8巻, 大乗社, 1935年) 55頁。

(43) 『大乘』第5巻第10号, 1954年, 55頁。大谷光瑞と南洋との関係を示すものに矢野暢『「南進」の系譜』に, 次のような文章があるので引用しておく。「ところで大谷光瑞である。西本願寺の固苦しい伝統と格式の中で生まれ育った彼は, その反動として, 豪放で行動主義的な性格の持ち主として成人した。大谷光瑞と南方との接触は, 大正四年初頭の南アジア旅行の時に始まる。そして, 大正六年にはスラバヤに蘭領印度農林工業株式会社というのを設け, 大正七年にはセレベスのメナド近くの高原にあるノーガン珈琲園を買収, 大正九年には, ジャワ東部に農園を入手している。ソレまでの仕事はあまりうまく行かなかったようで, 大正十一年にはブレアンガン州に香料植物を栽培する農園を新たに拓いている。そして, その香料園を, 『大谷光瑞農園』と名付けて終生いつくしんだ。それは高台にあったので, 避暑のために別荘『環翠山荘』をそこに建築, 大正十三年にこれが完成したあとは, 昭和九年まで毎年七, 八, 九月の三ヶ月をここで過ごす習慣になった。昭和五年にはガロー近郊の蘭人経営のホテルを買収し, これを『大観荘』と名付けてもう一つの別荘とした。ジャワの在留邦人が『準滞留者』とみなすほど, 光瑞はジャワでの生活と開拓事業を愛好した」。

(44) 『鏡如上人年譜』鏡如上人七回忌法要事務所, 1954年, 79頁。

(45) 同上書, 79頁。

(46) 前掲『在南三十五年』248頁。

(47) 柱本瑞俊(1888～1958年)は大谷光瑞の義理の甥にあたる。鹿児島県性應寺に生まれる。光瑞の側近として南洋にしばしばお供した。本願寺の室内部長を務めた。柱本照映『桃源山明覺寺誌』に詳しい。

(48) 前掲『戦前シンガポールの日本人社会』48～50頁。

(49) 木場明志「近代における日本仏教のアジア伝道」(『日本の仏教』第2号, 日本仏教研究会編, 法蔵館, 1995年) 218頁。また奈良康明氏は『日本の仏教を知る事典』(東京書籍, 1994年)のなかで「明治期以降, 多くの日本人が移民として, ないし, 他の種々の目的のために, 海外諸国に出かけていった。それに付随して仏教諸派(神道, キリスト教も同様)も海外に進出, 布教所や寺院を建てた。基本的には一生あるいはかなり長期にわたって在留する日本人のための仏教であり, 従って日本内地の寺院の延長としての機能を果たしていた。例えば葬儀や祖先崇拜, 通儀儀礼, 祈願等にかかわる諸儀礼の司祭や, それぞれの宗派の教義と実践の教化活動, 日曜学校, ボーイスカウト, 日本語学校等である。とくにアメリカ本土, ハワイ,

南米諸国等では、仏教及び寺院は当時苦しい状況にあった移民たちの心の支えだった。人々は種々の情報を交換し、慰めあい、子どもたちの結婚話をすすめるなど、寺院は一種のサロンとして機能していた。仏教は日本文化の象徴であり、日本人としてのアイデンティティーを確かめる中心的なはたらきをもっていたのである。しかし、旧朝鮮、台湾のように、日本の植民地であった国では事情が異なっている。確かに植民地支配に関連して多くの日本人が滞在していたし、その人々に対して仏教が同様の機能を果たしていたことは事実である。しかし、それに加えると、日本仏教諸派は日本の国策に同調し、総督府と不即不離の関係を維持しながら、植民地支配を宗教の面から促進し、それによって教線を拡張していった。具体的には、天皇制と軍国主義、植民地主義の国策を支持し、現地の人々の日本への帰属意識の涵養、軍隊布教、従軍布教を積極的に始めている……」とされ、戦前の仏教の果たした役割をどちらかというマイナス面にとらえられている。

[付記]

シンガポールの予備知識なしに、昨年12月に初めてシンガポールを訪れたが、かつての同僚郭俊海先生（現九州大学留学生センター）のおかげで楽しく、愉快地シンガポールを知ることが出来た。本稿も郭先生のすすめによるものである。先生の学恩に深く感謝したい。